

「両輪を動かす力」



先般、令和最初の学会大会が北海道教育大学釧路校で盛況のうちは無事終了しました。開催校の先生方、大会委員会をはじめとする役員、事務局の先生方、それに参加して頂きました多くの皆様に深く感謝致します。

さて、北海道体育学会を車（くるま）になぞなえるなら、その両輪の1つは前述の学会大会。今回の学会大会は、発表数（38演題）の多さのみならず、その内容もたいへん充実したものでした。若手賞に応募して頂いた12演題についても、いずれも完成度が高く、惜しくも賞を逃した10名の若手研究者にも拍手を送りたいと思います（若手研究者賞の受賞者につきましてはHPをご覧ください）。

両輪のもう1つは機関誌、「北海道体育学研究」と言えるでしょう。今年度に発刊された第54巻には14

会長 神林 勲（北海道教育大学札幌校）

編もの学術論文が掲載されました。掲載数はこれまでの最高ではないかと思えます（過去、第50巻の11編が最高?）。投稿して頂いた先生方、編集委員会の先生方および論文審査にご協力を頂きました先生方に深く感謝いたします。

このように見ますと、令和元年度の「両輪」は大きく滑らかに回転したと言えるのではないのでしょうか。ではハンドルを握っていたのは？ それは役員会・事務局の先生方です。役員・事務局の先生方のご尽力に心より感謝致します。

そうそう忘れてはならない大切なもの、「両輪」を動かしたエンジンは？ それは会員の皆様のお力です。来年度はいよいよ学会大会は60回の還暦（機関誌は55巻）。会員の皆様のお力をエンジンに、来年度も両輪が益々大きく滑らかに転がるように努めて行きたいと思えます。

「ゴールドンスポーツイヤーズの到来」

理事長 石澤 伸弘（北海道教育大学札幌校）

いよいよわが国は「ゴールドンスポーツイヤーズ」に突入し、昨秋のラグビーワールドカップ（RWC）、今夏の東京オリンピック・パラリンピック2020（オリ・パラ）、そして、来春の世界マスターズゲームズ（WMG）と、3年連続でメガ・スポーツイベントが開催されることとなります。

元ラグーマンの筆者は9月22日のRWCイングラ

ドVS トンガ戦を、大枚をはたいて購入し、観戦しました。開催前まではその盛り上がりが見えなかったRWCでしたが、蓋を開けてみれば日本代表のベスト8進出の躍進もあり、大成功の内に終了致しました。期間中、毎日のように話題に上っていた「ノーサイド（試合が終われば敵味方はない）精神」ですが、ノーサイドという言葉がラグビーで使われているのは、今ではわが国くら

いだと言われていました。しかしこれを契機に、世界中にラグビーの素晴らしいマインドが再発信されればと感じました。

またオリ・パラに関しては、幸運なことに自宅がある札幌で行われるサッカーの予選が当選しました！ マラソンと競歩の札幌移転も決定し、テンションは否が応にも上がってきております。

かくなる上は来年に向けて体を造り、2大会連続でWMGに、「アスリート」としてエントリーをしたいと考

えております（笑！）



3人ともラグーマンでした・・・)

* 筆者は前回（2017年）のWMG（於オークランド、NZ）に「硬式野球」で参加し、銅メダルを獲得しました。（写真右が筆者。なぜか

写真で振り返る北海道体育学会第59回大会



口頭発表の様子



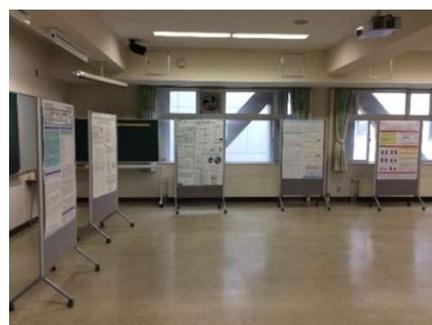
ポスター発表の様子



楽しいランチタイム



そのお弁当の中身は



ポスター会場の様子

口頭発表傍聴記

秋月 茜（拓殖大学北海道短期大学）

本年度の学会大会における口頭発表は、大会両日合わせて27題でした。皆様の発表概要について報告します。

若手研究者の発表では、能代氏（北海道教育大学大学院）は、バスケットボールの「走り出し3歩」を強調する指導法には一定の合理性があることを検証。緒方氏（釧路市立清明小学校）は、“運動が苦手”な学習者における指導では「動く感じ」を「自分ごと」として考え、練習することが課題解決の鍵となることを提示。平原氏（旭川市消防本部南消防署）は、野球の投球モーションの目の付け所の違いが盗塁における予測判断の正誤に及ぼす影響を検討。高橋氏（北海道教育大学大学院）は、10週間のバルシューレプログラムが子どもの実行機能に影響を与えるか検証。八田氏（酪農学園大学）は、30gの糖質摂取によって運動誘発性低血糖が、特に全身持久力が高いもので生じる可能性を示唆。藤江氏（酪農学園大学）は、高温環境下における高強度運動後のシェイクのリカバリー食としての効果が、同糖質量のスポーツドリンクと同程度であることを示唆。森氏（北海道教育大学釧路校学生）は、小・中学生における体育・運動に対する意識を調査すると、学年進行に伴った意識変容が男女間で傾向に違いが生じることを示唆。大友氏（札幌国際大学）は、テニスにおけるサーブのスタンスの違いによる様々な球種の速度と回転数の違いを検討。高木氏（札幌国際大学大学院）は、中学生サッカー選手の体力に対する相対的年齢効果が体力要素によって傾向が異なることを示唆。阿部氏（北海道教育大学大学院）は、サッカーのゴールキーパー用アジリティテストが既存のテストと異なるアジリティをも評価しうるテストである可能性を示唆。阿羅氏（旭川工業高等専門学校）は、実態把握が難しいとされてきた地下鞠を公家鞠技術と比較を行い、実際の技術を身体表現する実践的な研究を報告。なお、酪農学園大学の八田氏、旭川工業高等専門学校の阿羅氏が若手研究者賞を受賞されました。

新出氏（東海大学）は、パークゴルフのおもしろさを概要やプレー中の局面、他人との関係などの観点を組み込んだ調査から検討。山本氏（北海道教育大学釧路校）は、初心者が鉄棒運動の前方支持回転の粗形態の発生に至るための回転開始の技術に関わるやり方を発生運動学

の観点から検討。高瀬氏（帯広大谷短期大学）は、幼児を対象に支持での川跳びの指導事例を取り上げ、幼児の運動指導における示唆を得るため動感が発生する過程を分析。清野氏（北海道釧路養護学校）は、ラインバスケットボールの学習を計画・実施し、その可能性と課題について検討。野口氏（札幌国際大学大学院）は、中学生を対象にバスケットボールのワンハンドシュートの指導において必要な考慮すべき事柄に関する考察を試行。多賀氏（苫小牧工業高等専門学校）は、幼児を対象にサッカーのドリブルスキル向上のためのトレーニング後に疾走能力の向上や技術的変化があることを報告。西山氏（釧路工業高等専門学校）は、卓球のラケットブレードを構成する接着剤の種類によってラケットブレードの反発に影響を及ぼすことを報告。樋口氏（釧路工業高等専門学校）は、卓球の打球感を示すメーカーカタログの衝突実験で得た打球感を数値化した数値の相関関係を検討。小林氏（札幌国際大学）は、Functional Movement Screenの評価の特性について、概ね項目反応理論モデルに適合すると考察。板谷氏（北海道教育大学旭川校）は、二重課題下におけるパフォーマンスは優先して注意を向ける課題の選択に依存する可能性があることを報告。河本氏（北海道教育大学附属札幌小）は、体育授業においては、努力過程に価値を置き、没頭する経験を有することで運動が好きになる可能性があることを示唆。梅田氏（あいの里高等支援学校）は、高等特別支援学校において自立活動の観点を指導に導入することで短距離走のクラウチングスタートからフィニッシュの動作を習得でき全員のタイムが伸びたことを報告。石橋氏（北海道教育大学大学院）は、児童の立位姿勢に着目し、姿勢の型および姿勢の状態と体力との関連性を検討。木本氏（藤女子大学）は、多段階運動負荷時において安全で効果的な至適運動強度の同定が可能か否かを検討。瀧澤氏（身体開発研究機構）は、1500m、5000mで高い自己記録達成率を得るためには、走行距離を増やすよりも走行速度を上げる方が重要であることを言及。

以上、口頭発表では、それぞれ大変意義のある研究ばかりでした。皆様の研究が今後も、更なる発展を遂げることをお祈りし、口頭発表傍聴記とさせていただきます。

講演会傍聴記

小倉晃布（北海道教育大学岩見沢校）

先般、北海道教育大学釧路校にて開催された「北海道体育学会第 59 回大会」にて、大阪経済大学の相原正道先生による『オリンピック・パラリンピックのレガシーを考える』をテーマとした教育講演が行われた。

まず、大会委員長の越川茂樹先生（北海道教育大学釧路校）によって相原先生の経歴が紹介された。相原先生は、研究者でありながら 2016 年・2020 年の東京オリンピック招致に大きく関わって来られ、今回の講演では、そのようなオリンピック招致活動の舞台裏も含め、実際に招致活動に関わった相原先生ならではのお話を拝聴することができた。講演中のメモと記憶をたどりながら、以下に講演内容をまとめていきたい。稚拙な文章についてはご容赦願いたい。



今回、相原先生が話された主な内容は大きく分けて 2 点であった。TOKYO 2020 の“レガシー（遺産）”を考えるに当たり、ハードレガシー（施設・建物など）の視点とソフトレガシー（人、サービス、技術、価値観など）の視点を持つことの意味である。

まず、ハードレガシーについての相原先生の話は、非常に刺激的な内容であった。「皆さん、これを見て何を感じますか」と、前のスクリーンに映し出された写真は先日完成したばかりの「新国立競技場」であった。当初、新国立競技場の建設案はザハ・ハディドさんの案であったが、結局は建築費などの増大が批判を受け、白紙撤回されることになった。

ここで相原さんは、パリのエッフェル塔の写真や日本の国立代々木競技場の写真を引き合いに出し、当時のそれぞれの建築物に関する批判のことについて触れられた。パリのエッフェル塔に関しては、建設当時、パリ市民か

ら「パリに似合わない」「大きすぎる」などの多大な批判を受けたようである。また、日本の国立代々木競技場についても競技を行う上で構造的に無駄があり、その点について批判を受けた、ということである。

それを踏まえると、今回の TOKYO 2020 のハードレガシーは未来志向的に“レガシー”となるのかどうか、ということであると思われる。建設時の人々の意見や批判を受け、それに呼応するように小さくまとまり、規模を縮小し、妥協点を探った結果が、未来に“レガシー”として残るのか。先見性という言葉でも表現できるかも知れないが、そのような視点に立ったときに、新国立競技場に代表されるハードレガシーの価値について改めて考えさせられる内容であった。

次に、ソフトレガシーについてである。相原さんは TOKYO 2020 では、ソフトレガシーとして日本人の持つ「より美しさ」を強調していきたい、と話されていた。目に見える施設・建築物だけでなく、目に見えないおもてなし・思いやり・気配りや、体操の内村航平選手やフィギュアスケートの羽生結弦選手に代表されるような細部にまでこだわった日本人の美意識そのものである。その「より美しさ」の価値観は、今回の TOKYO2020 の環境意識に繋がり、選手村で使用される車がトヨタの電気自動車になったり、大会期間中の CO2 排出をゼロにする目標を掲げたり、聖火の燃料として次世代エネルギーの水素燃料を使用したりするなどを世界に向けて発信していくことが、TOKYO2020 がソフトレガシーとして未来に残せる遺産ではないかということであった。

オリンピック・パラリンピックは 4 年に一度のスポーツの祭典であり、開催国はその開催を成功させる義務を負う。しかし、相原さんの言葉に「日本ほど、オリ・パラを上手に運営できる能力を持つ国・国民はいない」という力強い言葉があった。新国立競技場などのハードレガシーに紆余曲折があったように、準備期間には大きな課題も見えてくるが、オリ・パラの開催中、開催後に日本人の価値観を世界にどのように発信できるか、それが本当の意味での“レガシー”であり、今、この時代に TOKYO でオリ・パラを開催することの意味に繋がるのではないかと感じながら、講演を聞き終えた。

ポスター発表傍聴記

佐藤 未来（帯広大谷短期大学）

本年度の学会大会では、1日目の午後に、11題のポスター発表が実施されました。以下に皆様が発表されました内容をご報告します。

高橋先生（東海大学）は「中学校体育授業におけるフィードバックの方法の違いが生徒の思考力に及ぼす影響－柔道の授業分析から－」という題名で、中学校体育授業において課題の発見と改善に関する思考力には、生徒同士のフィードバックが有効であることをご報告されました。

須合先生（北海道教育大学附属札幌小）は「生活科での栽培活動が給食に関する意識と行動に与える影響－小学校2年生を対象とした実践調査から－」という題名で、小学2年生を対象とした授業内で行う農業体験活動が、子どもたちの野菜や給食に関する興味・関心を高めることをご報告されました。

志手先生（北海道教育大学岩見沢校）は「小学校における身長発育とSAQ能力およびBSSC運動遂行能力の関係－アロメトリー分析からの検討－」という題名で、小学生児童において、SAQ能力は男女とも比較的早い身長発育段階で発達し、BSSC能力では男子で比較的遅い身長発育段階で増大することをご報告されました。

丸山先生（名寄市立大学）は「アスリートはなぜ風邪をひきやすいのか－運動ストレスにより口腔内粘膜で誘導される転写因子の解析－」という題名で、ハーフマラソンに参加した大学生においてレース前後の唾液分泌量が低下していたこと、唾液中の免疫機能に関する因子に変動がみられたことをご報告されました。

奥田先生（北海道教育大学岩見沢校）は「小学校におけるボールゲームの戦術能力に関する学年間の差異－3年生から5年生の比較－」という題名で、小学校3年生から5年生の男女における学年間の戦術能力について、女子児童でのみ差異が認められたことをご報告されました。

佐藤先生（藤女子大学学部生）は「単純作業負荷中の自然音の聴取がストレス指標に与える影響」という題目で、女子大学生を対象とした単純作業負荷時に、自然音を聴取することで自律神経系の交感神経が沈静化することや、作業ストレスが緩和する可能性をご報告されました。

上家先生（札幌市立中の島小学校）は「小学校におけ

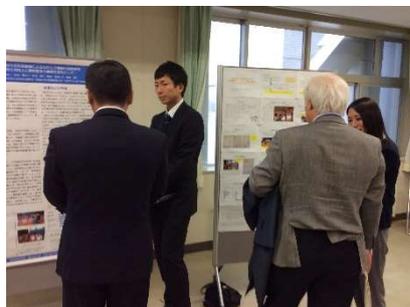
る外部講師によるなわとび運動の指導実践－全身持久力向上と運動意欲の継続を目的として－」という題名で、上家先生らが外部講師として実施したなわとび運動の指導内容が、小学生のなわとびに対するポジティブな意識につながることをご報告されました。

石井先生（北翔大学北方園生涯スポーツ研究センター）は「北海道A小学校における朝運動プログラムの取り組み－運動遊びを通じた異学年交流－」という題名で、小学生を対象とした「朝運動プログラム」の実施は、児童の運動の機会の増加や運動意欲の増進につながることをご報告されました。

中島先生（北海道教育大学札幌校）は「中学校体育授業における立位・座位による対話的活動場面の差異－話し合いの質的・量的な検討から－」という題名で、中学生を対象とした体育授業において立位・座位といった身体の姿勢の違いが、話し合いの質的・量的に影響する可能性をご報告されました。

東浦先生（亜細亜大学）は「体育授業におけるフットサルが注意機能に及ぼす影響」という題名で、運動部に所属する大学生を対象とした体育実技のフットサルは、視覚的注意機能にネガティブな影響を及ぼす可能性をご報告されました。

石原先生（玉川大学脳科学研究所）は「体育・運動機能および体格と社会認知機能の関係」という題名で、22歳から37歳の成人を対象とした社会認知機能テストにおいて、社会的認知機能は持久力・巧緻性が優れているものほど高いこと、BMIが高い人ほど低いことをご報告されました。



前回大会と同様に多岐にわたる分野の研究が発表され、大変興味深く拝聴させていただきました。ディスカッションの時間

では積極的な意見交換がなされ、有意義な時間を過ごすことができたのではないかと思います。次回の記念大会においても、活発な議論や意見交換の場になることを期待しております。



若手研究者賞を受賞して

「感謝と今後について」

阿羅功也（旭川工業高等専門学校）

この度は「若手研究者賞」として表彰いただくことができ、大変嬉しく思います。北海道体育学会への参加は今回が初めてでした。賞をいただけたことはもちろんですが、地元でもある北海道に戻り、先生方との新しい繋がりが生まれたことに喜びを感じることができました。寒い毎日が続く土地ではありませんが、「北海道の温かさ」を感じた学会でした。

今回発表させていただいた内容は「蹴鞠」に関する研究です。これまでは歴史的資料の分析により蹴鞠史が構築されてきました。私はそういった資料をもとに「実際の動きに再現する」ことをテーマとしています。現在の博物館やミュージアム等でも課題として挙げられている、展示以外の歴史の語り方。再現研究を進めることにより、寄与できるのではないかと考えています。

蹴鞠について少し紹介させてください。蹴鞠にはもともと「勝ち負け」という概念がありません。どれだけ綺麗

に鞠を蹴り上げることができるか。仲間で助け合い、どれくらい鞠を連続で蹴り上げることができるかが重視されます。近年、2020 東京五輪の影響もあり、メダル志向の強まりによる勝利主義。優秀な選手とそうでない選手といったゼロ・サム的なスポーツ観が生まれていると感じています。蹴鞠には誰もが初めてスポーツに出会い打ち込んだときに感じた仲間との楽しい時間や、他者と比べない自己達成感といった本質が残されています。これは日本特有の遺産であると言えるでしょう。私はこのような蹴鞠の素晴らしさを、日々感じています。

これからはさらに蹴鞠の普及やスポーツ観の再考に向けて研究に取り組んでいきたいです。そして、これまで指導してくださった先生方への感謝の気持ちを絶やさず、自分らしく活動していきたいと思っております。今後ともご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い致します。

「受賞にあたり」

八田早那子（酪農学園大学大学院）

この度は、このような賞をいただき、大変嬉しく思っております。指導教員の山口太一先生をはじめ、共同研究者としてご助言をいただいた共同研究者の先生方、被験者として協力していただいた方、実験と一緒に進めてくれた研究室の後輩のおかげでこのような賞をいただくことができました。本当にありがとうございました。

今回の発表テーマである「朝食摂取後における運動前の糖質摂取量の相違が運動誘発性低血糖に及ぼす影響」は、朝食を摂取して運動前にスポーツドリンクと同等量の糖質を含む飲料を摂取した場合に運動誘発性低血糖は発生するのかを検証した研究です。

運動開始前に、食事で栄養補給を行うことが推奨されていますが、私は運動を行う前は食事を食べずに運動を行っていたため、本当に運動前に栄養補給は必要なのか疑問に思い続けていたことをきっかけに、運動前の栄

養補給について研究を始めました。

今回の結果から、朝食を摂取した時、スポーツドリンクと同等量の 30g の糖質を含む飲料を運動開始 30 分前に摂取すると、運動誘発性低血糖が発生することがわかりました。また、全身持久力が高い被験者ほど血糖値が低下することもわかり、全身持久力の高い選手ほど運動誘発性低血糖に気をつけなければならないことが考えられました。

今回の研究を終えてこれから検討しなければならない点も多く見つかりました。学会大会で先生方からいただいたご助言も踏まえ、より良い研究としてきたいと思っております。今回の経験を糧に、今後もスポーツの現場に還元できる研究を引き続き行ってまいります。まだまだ至らない点も多いですが、どうか引き続き、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

北海道体育学会第 58 回大会を終えて

大会事務局 越川 茂樹（北海道教育大学釧路校）

この度は、北海道体育学会第 59 回大会を無事に終了しましたことを、役員・学会事務局を初めとする関係各位ならびに参加者の皆様に感謝申し上げます。

2 年前に手を上げ、学会大会を開催することとなりましたが、果たして道東に会員の皆様は足を運んでくださるのかと、日が経つにつれ不安が増してきました。ところが、そんな不安をどこかに吹き飛ばす多くの皆様からのエントリーがあり、ほっと胸を撫で下ろした次第です。

1 日目と 2 日目の口頭発表ならびにポスター発表においては、多岐にわたるテーマに対して活発な議論をいただき、大変満足しております。

教育講演は「オリンピック・パラリンピックのレガシーを考える」をテーマとし、2016、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックの招致活動に携わった稀有な研究者である大阪経済大学の相原先生をお招きしました。先生には、スポーツビジネスの立場から、オリンピック・



パラリンピックのレガシーについてご講演いただきました。もともとこのテーマでシンポジウムを企画した背景の一つに、釧路市が

2020 東京オリンピック・パラリンピックにおけるベトナムのホストタウンとして、パラリンピック選手の受け入れ準備を進めていることがありました。ところが、学会大会直前に、札幌における男女マラソンと競歩の開催が決定するという事態が発生しました。今回の教育講演をさらに意義深いものにしたのではないかと思います。

懇親会につきましては、参加者の皆様の交流が活発になればと、立食のビュッフェスタイルとさせていただきました。皆様にとっては、懇親会が楽しい語らいの場となりましたでしょうか。

最後に、改めて大会に参加されました全ての方々に、心よりお礼申し上げます。

研究委員会活動報告

研究委員 小田 史郎（北翔大学）

本年度の学会大会は、口頭発表 27 題、ポスター発表 11 題の計 38 題と、過去最多に並ぶ演題数の発表をいただきました。その研究分野も非常に多岐にわたり、とても充実した内容となりました。またそれぞれの発表に対してフロアから質問が多く飛び交うなど、北海道における体育・スポーツ研究のパワーが感じられる発表となりました。今後さらに北海道の体育・スポーツ推進に寄与する研究が進められることが期待されます。

今回、若手研究者賞には 12 題のエントリーがありました。厳正な審査の結果、阿羅功也氏（発表演題：大衆蹴鞠「地下鞠」の技術復元に関する研究－貴族の蹴鞠「公家鞠」技術との比較検討－）と八田早那子氏（発表演題：朝食摂取後における運動前の糖質摂取量の相違が運動誘発性低血糖に及ぼす影響）の 2 名が受賞されました。阿羅氏の授賞理由は、あふれる情熱を持って技術の復元に着手している点から実験歴史学のますますの発展が期待

できること、八田氏の受賞理由は、研究の経過がとても明快であり現場への貢献が期待できること、が挙げられました。若手研究者として今後の活躍が期待されます。また今回受賞を逃した方々におかれましては、これからも地道な研究を継続していただければと思います。来年度もまた多くの方が若手研究者賞に挑戦することを願っております。

北海道体育学会は、来年度に 60 回目の記念学会大会を行い、2021 年には学会創立 70 周年を迎えます。こうした節目を記念して 2019 年年度、北海道における体育・スポーツ研究の活性化と道民のスポーツライフの充実に寄与することを目指して、研究助成制度を開始いたしました。厳正な審査の結果、3 題が採択され、4 月より研究がスタートしております。次回の記念大会において成果発表が予定されておりますので、楽しみにいただければと思います。

編集委員会活動報告

編集委員長 編集委員長 永谷 稔（北翔大学）

編集委員長も2年目となりました。まずは、無事第54巻が発刊できましたこと、ひとまずホッとしているところでもあります。本巻は、原著論文4編、研究ノート5編、実践研究5編、計14編と、例年にないボリュームとなりました。また、昨年度からの継続が2編あったものの、投稿自体は16編あり、大変喜ばしく、一方で審査員の依頼に相当苦戦することとなりました。残念ながら4編が掲載には至りませんでした。改めまして、投稿者の皆さまのご努力に敬意を表するところです。

今年度、編集委員会では投稿規定の見直しに着手致しました。①メールでの投稿とし、編集委員会専用アドレス宛としたこと、②超過ページ額をページあたり5千円としたことです。いずれも学会大会にて承認を得ることができました。ありがとうございます。また、英文抄録については、ネィティブチェックを経していない投稿も見受けられることから、受理後の作成でも構わないとするか、学会としてまとめてチェックを依頼するか、継続

検討中です。本年度のように、数多く投稿いただくことが今後続くかどうかわかりませんが、編集委員で審査に回すか否かを判断することも検討するところです。

いずれにしても、学会機関誌として条件を緩和し過ぎたことによるクオリティーの低下は避けなければなりません。投稿数が増えるのであれば、締め切りを無くし、十分なやりとりと審査に時間をかけるような、これまでの慣例を変更していくことも必要です。何を優先事項として、あるいは基準としていくか、検討は尽きません。今年度より学会大会での配布となり、コストも含めて学会員を増やし、業績のひとつとしての機関誌をどのようにしていくか、皆様と一緒に考えていかねばなりません。今年度も残り少なくなりますが、引き続き編集委員会や役員会で検討していければと思います。

最後に、本学会誌の充実、発展のために微力ながらも尽力致しますので、来年度も引き続きよろしく願い申し上げます。

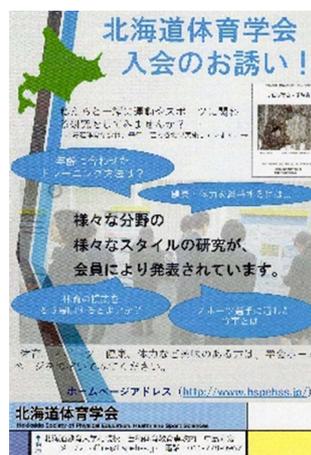
広報委員会活動報告

広報委員長 小出 高義（北海道教育大学旭川校）

広報委員ではこれまでニュースレターにより、会員相互の情報交換に関する活動を中心に行ってきました。印刷されたニュースレターを郵送していたころは、学会に参加することができなかった会員にもどんな学会であったのかをお知らせする役割が大きかったと思います。

けれども、今日のように郵送されずに、学会ホームページから誰でも目にするようになることになると、その役割は広がりを持つようになりました。そのため、会員以外で本学会に興味を持ち、ホームページを覗いていただいた方々に読んでもらうことも意識し始めました。

つまり、広報委員会では、会員に向けた「内への発信」と、会員以外の「外への発信」を求められるようになったのです。最終的に、この外への発信は、学会員の増加を目指しての活動となります。今回の59回大会においても、市民公開講座として学会員以外の方に門戸を開いた「オリンピック・パラリンピックのレガシーを考える」の教育講演において、北海道体育学会への「お誘いチラ



シ」を配布することができました。それもこれも本会が毎年学会大会を発展的に積み重ねられていくことを願っての広報活動となります。

次回は、60回記念大会となりますが、大きなイベント後に、急に学会活動がさみしくなってしまうことはよく聞く話です。

記念大会に向けたエネルギーを、その後の学会発展のエネルギーに変換し、会員相互で協力するとともに、会員となる新しい仲間を増やしていく活動も忘れずに取り組んでいきたいと思っています。

そのために、広報委員会としてできることがありましたら、何なりと申しつけいただければと思います。

(子どもに対する障害予防の取り組み)

石橋勇司 (北海道教育大学大学院、札幌スポーツクリニック)

私が子どもに対する障害予防の必要性を強く感じるようになったのは、日々の臨床業務の中でした。

私は整形外科クリニックに理学療法士として勤務しており、日々幅広い年代の方々のリハビリテーションを担当させて頂いております。その中で、「身体に関わる知識を病院に来る前から浸透させられないか」や「どのように働きかければ予防につながるか」などの課題を持つようになりました。これは、多くの理学療法士が感じていることだと思います。その後、学校へ赴き子どもたちに身体のことについてお話しする機会を与えて頂くなどしておりましたが、その場限りのアプローチとなってしまうことが多く、今後どのようにすべきか迷うことも多くありました。そんな中で、北海道教育大学札幌校の神林先生に指導頂けるご縁に恵まれ、現在は勤務を続けながら大学院生として子どもの姿勢と体力との関連について

研究しております。「姿勢」は形としての姿勢という意味だけでなく、物事に取り組む態度としての「姿勢」という意味もあり、我々日本人にとって馴染みのある言葉だと思います。その姿勢が崩れることが身体に与える影響は様々で、姿勢の崩れが肩や腰の痛みといった慢性的な障害につながることは非常に多く、臨床場面でも毎日のように経験します。この「姿勢」を正すことができる能力を子どもの頃から身につけ、習慣化することができれば、障害予防につながると考え、現在研究を進めております。

最後になりますが、少子高齢化が進む現代において、子どもたちの将来的な健康を守ることは非常に重要となります。身体の不調を訴える子どもを一人でも多く減らすことができるよう、精進して参りたいと思います。今後ともご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い致します。

(スポーツ科学と選手指導)

渡部 峻 (北翔大学)

私は山形県の出身で大学でも野球を続け、将来は保健体育の教員になろうと北海道にやってきました。しかし、大学在学中に「バイオメカニクス」という学問に出会い、私の人生は一変しました。野球の経験は20年を越えていますが、研究者としてはまだまだ駆け出しです。私の専門であるバイオメカニクスはあらゆる計測データの結果が数値で表されます。極端なことを言えば、計測の仕方さえ覚えてしまえば、データはいくらでも算出できます。しかし、算出したデータをどのように解釈をするのかが一番重要です。現在はそこに面白さと難しさを感じているところです。修士課程では、野球の投球動作について研究してきましたが、学生の卒業研究をきっかけに様々な動作を分析し、新たな発見がたくさんあり、新鮮で楽しい時間を過ごしています。

また、今年度は硬式野球部の監督にも就任しました。部員は約100名。我々が所属するリーグは近年打撃力が

向上し、その中で勝っていくためには投手力の強化が必須でした。そこで、私は三次元動作分析装置を用いて選手の投球フォームを分析しました。選手個々が自身の弱点や強みを目で見てわかる、いわゆる「見える化」を実施しました。

よって、個々の実施すべき練習・トレーニングあるいは意識すべきところが明確になりました。それに伴い投手陣の技術力も向上していきました。あらためて、スポーツ科学を取り入れた指導が現世代の選手に有効であると実感しました。

しかしながら個々の技術の向上がすぐに試合の勝敗に繋げることができなかったことが今シーズンの大きな反省です。来シーズンは「変幻自在」をテーマに状況に応じたプレーが攻守に渡って実施できるように選手共々精進していきたいと思っております。

事務局より

中島 寿宏 (北海道教育大学札幌校)

いつも北海道体育学会の会員の皆様には大変お世話になっております。本学会幹事として事務局業務を担当しております中島寿宏(北海道教育大学札幌校)です。令和最初となる第59回大会では、参加者数・発表演題数が多く大変盛り上がりのある2日間となりました。会場担当をしていただいた北海道教育大学釧路校の先生および学生たち、関係者や参加者の方々のご協力に大変感謝しております。

2020年度の本学会の事業として、最も重要な位置づけとなるのは2020年11月14・15日に新さっぽろアーケシティホテルで開催が予定されている北海道体育学会70周年兼第60回記念大会となります。この大会では、通常の間頭発表・ポスター発表・シンポジウムなどに加えて、2019年度の研究助成対象となった3つの研究課題に関する成果発表が実施されます。また、歴代会長・名誉会員等の招待なども予定されています。今回の記念大会は、例年の学会大会よりも開催時期が少し早く、発表申込み・抄録原稿の締め切りの時期についても早まることが考えられます。お早めのご準備のうえ、ぜひ多く

の会員の方々にご参加いただきたいと思います。

その他に計画されている事業では、例年同様に5月下旬に臨時総会と話題提供発表があります。臨時総会は、今後の北海道における本学会の意義などを念頭に、会員の皆様には事業計画や活動方針などについて積極的にご意見を頂きたいと考えています。また、臨時総会後の第6回話題提供発表では、会員相互の情報交換・意見交流と研究内容の深化を目的として実施されます。話題提供発表では、過去のデータの再分析結果、他学会などの発表と同一内容のものや構想段階のものも発表可能な機会となっており、例年多くの発表があります。今年度はぜひ若手研究者の方々にも積極的な発表を期待したいと思います。

70周年兼第60回記念大会や臨時総会・話題提供発表などに関する詳しい情報は、学会HP(<http://www.hspehss.jp/>)に掲載いたしますので随時ご確認ください。学会メーリングリストを活用したメールでのご連絡も合わせて行っていきます。2020年度も本学会へのご協力をぜひよろしくお願いいたします。

★★

編集後記

ニュースレター11号も、無事に発行に至り、広報委員一同ホッとしているところです。本号では、北海道体育学会第59回大会が中心となっておりますが、学会傍聴記も文字がびっしりと並んでいるように、盛会で大変盛り上がりました。義務教育の現場に長年在籍していた私は、常に体育や運動をどう指導するかという目線で考えておりました。しかし、本学会大会に参加するようになり、運動やスポーツには様々な関わり方があり、何よりも自分自身が楽しまなければ、研究も進んでいかないのでは…という考えを持つようになりました。幸いなことに、一昨年よりメタボリック予備軍に加入することになり、生活の中にかかに運動を取り入れるかが、現在の大きな課題です。本大会での示唆に富んだ発表をもとに、少しでも楽しく運動やスポーツにかかわっていきたくと考えております。

次回の第60回の記念大会で、会員の皆様にお会いできるのを楽しみにしております。

広報委員 高瀬淳也

★★

ご多忙の中、原稿をお寄せいただいた先生方どうも有り難うございました。感謝申し上げます。

北海道体育学会ニュースレターNo. 11 令和2年1月26日発行 広報委員会委員長 小出高義

是非ご覧下さい 北海道体育学会公式ホームページ <http://hspehss.jp/>